

一)などと称せられる衣食技芸等の発達変化であった。これらはいずれも時が保存してくれた昔の生活の痕跡(こんせき)を頼りとして進むのであるが、その中でも一種最も豊富にしかつ確實なる遺物の、案外に顧(かえり)みられなかったものがあつた。それは何かということ人間そのもの、朽(く)ち残った骨ではなく活(い)きた人間の生き方である。すなわちその人の使う言葉、折々現れるその人の考えと心持ちとである。今まではただ一つ一つの珍しい風習、かわった歌や物語、謎(なぞ)や諺(ことわざ)、その他一括(いっかつ)して口碑(こうひ)と名付けているいろいろの昔話なども、物ずきの人の切れ切れの注意を引いてはいたが、その多くを集めて比較してみるまでは、それが我々の父祖のいずれより来たり、何を信じ何を恐れ何を愛し何を願っていたかという一般的の状態と、そのおおいの変化とを諒解(りょうかい)せしむるには足らなかったのである。幸いにしてこの学風のだんだん盛んになったお蔭(かげ)に、日本人の多数の過去の心が、少しずつ明らかになろうとしている。我々の先祖はことにその一特徴として、いまだ生れざる子孫を愛し、その繁栄を希(ねが)いその安全の計を立てた。彼等の最も怖れたのは家衰え子孫愚(おろ)かにして、死後に追慕(ついぼ)してくれる者の次

第になくなって行くことであつた。そうして人間らしくまた男らしく、欺(あざむ)かず怠(おこた)らず、神と秩序とを重んじていれば、すなわち家に幸いあって後裔(こうえい)たる我々も永く恩恵を受けるものと信じていたのである。

(『青年と学問』「柳田国男全集」27 ちくま文庫)

批評と芸術家の個性 小林秀雄

人は様々な可能性を抱いてこの世に生れて来(く)る。彼は科学者(かがくしゃ)にもなれたらう、軍人にもなれたらう、小説家にもなれたらう、然(しか)し彼は彼以外のものにはなれなかつた。これは驚く可(べ)き事實(じじつ)である。この事實を換言すれば、人は種々な眞實(しんじつ)を発見(はっけん)する事は出来るが、発見した眞實をすべて所有する事は出来ない、或る人の大脳皮質には種々の眞實が觀念(かんねん)として棲息(せいそく)するであらうが、彼の全身を血球と共に循(めぐ)る眞實は唯(ただ)一つあるのみだといふ事である。雲が雨を作り雨が雲を作る様に、環境は人を作り人は環境を作る、斯(か)く言はば辯證(べんしょう)法的に統一された事實に、世の所謂(いわゆる)宿命の眞の意味があるとすれば、血球と共に循る一眞實とはその人の宿命の異名である。或る人の眞の性格といひ、藝術家(げいじゅつか)の獨創(どくそう)性といひまた異(こ

とな)つたものを指すのではないのである。この人間存在の嚴然たる眞實は、あらゆる最上藝術家は身を以つて制作するといふ單純な強力な一理由によつて、彼の作品に移入され、彼の作品の性格を拵(こしら)えてゐる。

……かうして私は、私の解析の眩暈(めまい)の末、傑作の豊富性の底を流れる、作者の宿命の主調低音をきくのである。この時私の騒然(そうぜん)たる夢はやみ、私の心が私の言葉を語り始める、この時私は私の批評の可能を悟るのである。

(『様々な意匠』「小林秀雄全集」第1巻 新潮社)



3 現代日本と私たちの課題

▶ pp.198 ~ 199

『墮落論』一坂口安吾

人間。戦争がどんなすさまじい破壊と運命をもって向(むか)うにしても人間自体をどう為(な)しうるものでもない。戦争は終わった。特攻隊の勇士はすでに闇屋(やみや)となり、未亡人はすでに新たな面影によって胸をふくらませているではないか。人間は変りはしない。ただ人間へ戻ってきたのだ。人間は墮落(だらく)する。義士も聖女も墮落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うこと